

# シロナガスクジラ 南極海・南半球

Blue whale *Balaenoptera musculus*



Photo by F. Kasamatsu

南極海でのシロナガスクジラ (Photo by F. Kasamatsu)



Photo by H. Kato

オーストラリア南岸沖を泳ぐピグミーシロナガスクジラ (Photo by H. Kato)

## 管理・関係機関

国際捕鯨委員会 (IWC)

## 生物学的特性

- 世界に3亜種：南北の各半球の通常型（以下、シロナガスクジラ）、南半球の矮小型（以下、ピグミーシロナガスクジラ）
- 最大体長・体重：20~34 m（上顎先端~尾鰭分岐点）・80~190 トン
- 寿命：110~120 歳
- 性成熟年齢：10 歳程度（初期資源状態）、5~6 歳程度（1960 年代）
- 繁殖期・繁殖場：冬・低緯度海域
- 索餌期・索餌場：夏・南極海
- 食性：オキアミ等
- 捕食者：シャチ

## 利用・用途

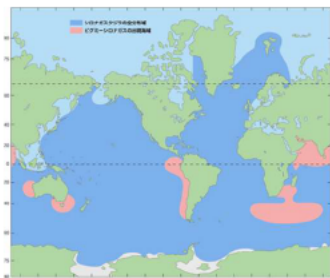
刺身、鯨油等

## 漁業の特徴

本系群は、南極海における近代捕鯨（捕鯨砲を使った捕獲）がノルウェーによって開始された1904年から主要な対象種として捕獲された。その後、1924年に誕生した母船式捕鯨により漁場が拡大し、1920年代後半~1930年代に捕獲の隆盛期を迎え、1930/31漁期には史上最高の41船団（ノルウェー、英国、オランダ、ソ連、南アフリカの5か国）が出漁して捕獲数のピークを記録した。日本も1936/37漁期から南極海捕鯨に参入した。その後、第二次大戦中に停滞したものの、戦後間もなく復興し、これらの国々によって捕獲が続けられた。第二次大戦以後、IWCによって大型鯨類を対象とした捕鯨業の管理が始まり、BWU（シロナガスクジラ換算制度）に基づいて、本種の産油量を基準に各鯨種の捕獲頭数が定められたが（1946~1971年）、資源状況の悪化に伴い、1964/65漁期から南極海における本種の捕獲は禁止された。

## 漁獲の動向

1910年代~1920年代前半は、南極海で年間数千頭レベルの捕獲が行われていたが、1920年代後半に1万頭を超えて急増し、1930/31漁期には過去最大の28,325頭を記録した。1940年代前半の第二次大戦に伴う減少、休漁の後、捕獲が再開し、1940年代後半~1950年代初めは毎年約5千~約8千頭が捕獲された。その後、資源の減少に伴い、捕獲頭数は減少し、1960年代初めには亜種のピグミーシロナガスクジラを合わせても千頭前後にまで減少した。1964/65年漁期以降は南極海全域で捕獲が禁止された。



シロナガスクジラ（濃青色）、ピグミーシロナガスクジラ（ピンク色）の分布図

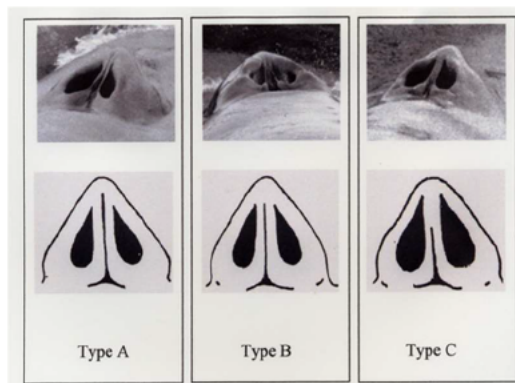
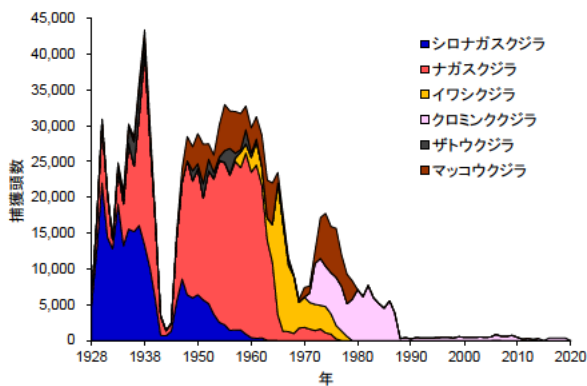
**資源状態**

本系群は最も資源が減少した系群の一つである。2008年のIWC科学委員会において、本系群の包括的な資源評価が実施され、1904年時点の初期資源量は256,000頭と推定され、1971/72漁期までに395頭(初期資源の0.15%)まで減少したこと、以降は年率6.4%で増加し、1997年時点の資源量は2,280頭(初期資源の0.9%)であることが合意された。資源量は初期資源の1%以下のレベルに過ぎず、資源水準は依然として極めて低いと判断された。2022年のIWC科学委員会では、2018/2019年時点の資源量は2,050頭(1,135~3,704)であることが暫定的に合意された(Anon.(IWC)2023)。しかしながら、捕獲停止後約50年経過しても資源量が初期資源量の1%に満たないことから、資源水準は、依然として極めて低位であると考えられる。資源動向については、最も減少した時点からの増加は見られたものの、1997年時点と2018/2019年時点の資源量から見ると、近年は横ばいと判断される。資源の回復が進んでいない要因には、同じ餌種を利用する等、本系群と生態的競合の関係にあるクロミンククジラの資源量増加もあると考えられており、本系群の回復に向け、鯨種間の競合関係を更に明らかにする必要がある。

**管理方策**

IWCでは商業捕鯨のモラトリウムを継続する一方で、管理対象資源の包括的資源評価を実施している。本系群については、2006年から資源評価作業が開始され、2008年に開催されたIWC年次会合において上記の結論を得て2008年に一旦終了した。現在、IWC科学委員会では、引き続き、南半球のシロナガスクジラ及び亜種のビッグミーシロナガスクジラの資源評価更新に向けて、系群構造の検討や近年の各国・地域から得られる知見の集約と検討が行われている。今後の本種の資源評価に向け、日本が南極海で実施している調査で得られる本種の分布、個体識別データ等の活用による貢献が期待される。

シロナガスクジラ(南極海・南半球)の資源の現況(要約表)	
世界の漁獲量(最近5年間)	なし(商業捕鯨モラトリウムが継続中)
我が国の漁獲量(最近5年間)	0頭
資源評価の方法	ロジスティックモデルを用いた個体群動態解析(Branch 2008)による資源動向と最新の資源量推定値
資源の状態(資源評価結果)	最新の資源量: 2018/2019年時点で2,050頭(暫定値としてIWCで合意) 資源水準: 初期資源量(256,000頭)の1%に満たず極めて低位 資源動向: 過去最低の資源量(395頭)からは増加したが近年は横ばい
管理目標	商業捕鯨モラトリウムが継続中であり、未設定
管理措置	商業捕鯨モラトリウムが継続中
管理機関・関係機関	IWC
最新の資源評価年	2008年(2022年に暫定値に更新。現在は資源評価作業中)
次回の資源評価年	未定



亜種	頻度		
	TypeA	TypeB	TypeC
ビッグミー	17	7	1
シロナガス	0	12	0
Chi-square	Chi-square=16.8253, P=0.00002		

1928年から1986/87年までの南極海母船式捕鯨によるシロナガスクジラ(濃青色)捕獲頭数の変遷、1987/88年以降は調査による標本採集数の変遷

シロナガスクジラとビッグミーシロナガスクジラの鼻孔形態の亜種間比較